



Title	中級前半の韓国語学習者に対する自己紹介文作成指導への示唆：日本語を母語とする大学生を対象として
Author(s)	秦, 秀美
Citation	外国語教育のフロンティア. 2023, 6, p. 133-144
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91034
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中級前半の韓国語学習者に対する 自己紹介文作成指導への示唆 —日本語を母語とする大学生を対象として—

A study of teaching Korean pre-intermediate learners' writing of a self-introduction letter for Japanese university students

秦 秀美

要約

本稿は、日本の大学で韓国語の基本文法を習得し終えた日本語を母語とする大学生を対象に、日本語母語話者と韓国語母語話者の大学生が授業担当教員に母語で書いた自己紹介文のデータを用いて、自己紹介文作成の指導に必要な内容を開示内容面と言語面で考察した。

まず、日本語母語話者と韓国語母語話者が好んで用いる開示内容に相違の見られる項目があり、目標言語の母語話者の自己紹介文に近づけた枠組みによる指導だけでは、学習者の書きたい内容が表現されない可能性があることに触れた。相手との関係構築を目的とする自己紹介文であるだけに、学習者が書きたいと思う開示内容を把握した上で、それを表現するための言語情報を提供することが望ましい。

次に、両言語が似ているために、使用条件のずれに気づきにくく、日本語の直訳では誤りを引き起こす語、文型、表現を特定し、中級前半として特に指導が必要な学習項目について述べた。その多くは初級で学習した項目であるが、使用条件のずれにより習得が難しいと思われる用法であり、日本語母語話者の開示内容に多く現れた。そのため、単に韓国語の語、文型、表現を導入した書き方の指導だけでは不十分で、韓国語と母語である日本語の違いについて意識できるように指導することが重要であると考えられる。

また、今回の考察を踏まえると、中級の学期はじめの自己紹介文作成の指導では、初級で学習した既習内容と、使用条件のずれにより習得が難しいと思われる新しい用法を、既習内容を元に発展させた形で取り入れることができ、初級から中級への橋渡しの授業展開が期待できる。

キーワード：韓国語教育、自己紹介文、中級前半レベル

1. はじめに

学期はじめの外国語授業において自己紹介文作成は取り組みやすいテーマであるが、本稿では、日本の大学で週2コマの韓国語授業を通して一年間一通り基本文法を習得し、韓国語学習2年目に入る日本語母語話者の大学生を対象として、授業担当教員を読み手とする自己紹介文作成を取り上げ、その具体的な指導内容を示す。

韓国語教育の観点からの自己紹介文に関する先行研究は、進学や就職活動といった

目的に焦点を当て、学習者の誤用や、韓国社会で重視される文章構造、開示内容、表現法を分析し、教育方法を示しているものが多く(가리리 2014、하승현 2013)、日本語母語話者の初中級学習者を対象としたものはほとんど見られない。

自己紹介文の目的によっては、目標言語の社会で求められる枠組みの内容に沿った書き方の指導が必要な場合もあるだろうが、相手との関係を築くことにその目的がある場合、枠組みの開示内容を教師があらかじめ提示するのではなく、母語ではどのような内容を開示しているのか、学習者が開示したいと思う内容を調べた上で提示する配慮も必要であると考えられる。また、中級段階に入る日本語母語話者の韓国語学習者の場合、初級段階での日本語直訳による学習法に慣れていることもあり、日本語の直訳が原因となる誤りが一層出現しやすいと考えられる。学習者が開示したい内容を母語でどのように表現しているのか、母語で書いたものを対照言語学的視点から分析し、学習者の誤用が予測可能な表現を指導項目として取り入れることは有意義であると考えられる。

そこで、本稿では、日本語母語話者の学習者が母語で書きたいことを韓国語で表現できるように指導するという観点から、日本語母語話者と韓国語母語話者の大学生が授業担当教員に母語で書いた自己紹介文をデータに用いて、開示内容面と言語面で比較し、必要な指導内容を検討する。以下、2 節では分析対象のデータについて説明し、3 節では、日本語母語話者と韓国語母語話者がどのような開示内容を好んで用いているのかについて分析結果を述べる。4 節では、両言語が似ているために、使用条件のずれに気づきにくく、日本語の直訳では誤りを引き起こす語、文型、表現を特定して、中級前半として特に指導が必要な学習項目について述べる。5 節はまとめである。

2. 分析対象のデータ

本稿で分析対象としたのは、外国語授業担当の教員に、日本語母語話者と韓国語母語話者の大学生が母語で書いた自己紹介文である。日本語のデータは、韓国語学習 2 年目に入る日本語母語話者の大学生(近畿在住)が学期はじめの韓国語授業で担当教員に書いたもので、合計 50 件(50 名分)を集めた。韓国語のデータは、日本語学習 2 年目に入る学期はじめの授業で、担当教員に書くという状況を設定し、韓国語母語話者の大学生(ソウル在住)に作成してもらった合計 31 件(31 名分)である。10~15 分の作成時間を設けて、日本語は 2022 年 4 月、韓国語は 2021 年 11 月にデータ収集を実施した。中級前半学習者を指導する際に必要な作文の分量、伝えたい開示内容や言語表現の重要な箇所を観察しやすくなることを考え、10~15 分の作成時間を設けた。

3. 分析結果—自己紹介文の構成と開示内容の比較

収集した日本語 50 件、韓国語 31 件の自己紹介文の構成を開示内容に合わせて分析したところ、「書き手の背景に関する事実関係の基本情報Ⅰ(名前、出身地、所属など)」、「書き手の行動および行動の背景となる基本情報Ⅱ(好きなこと、近況報告、性格、過去の経験など)」、「読み手と関わりを持つ授業関係の情報(受講理由、一年間学習した感想、現在の能力、授業に臨む姿勢など)」という大きく 3 つの枠組みから構成され、共通して開始部は基本情報Ⅰで始まる結果であった。

以下、各開示内容の項目の詳細と使用件数を順に見ていく。まず、表 1-1 は日本語母語話者の、表 1-2 は韓国語母語話者の基本情報Ⅰに現れた各項目の使用件数を示したものである。

表 1-1 基本情報Ⅰの各項目における
日本語母語話者の使用件数（％）

名前	46（92.0%） ¹⁾
出身地	36（72.0%）
所属	30（60.0%）
居住地	5（10.0%）
出身高校	3（6.0%）
家族	2（4.0%）
ペット	2（4.0%）
誕生日	1（2.0%）
年齢	1（2.0%）

表 1-2 基本情報Ⅰの各項目における
韓国語母語話者の使用件数（％）

名前	31（100.0%）
所属	26（83.9%）
家族	16（51.6%）
年齢	13（41.9%）
居住地	10（32.3%）
出身地	6（19.4%）
誕生日	2（6.5%）
出身高校	1（3.2%）
ペット	1（3.2%）

日韓ともに「名前」「所属」が占める割合が高い点で共通するが、日本語において所属の記述がやや低く現れたのは、当該授業が学部ごとに開講されており、同じ学部から集まったクラスのため、読み手にすでに情報が開示されていると判断したものと思われる。これに対し、韓国語母語話者の場合、様々な学部から集まった調査協力者のため、所属は読み手に開示されていない情報である。そのことから所属を開示する件数に差が現れたと考えられる。

一方で、韓国語では「名前」「所属」に続いて、「家族」の項目が多く現れた。家族構成や人数を示した程度であるが、自己紹介文の開示内容と判断した人が日本語に比べて多いことがうかがえる。また、「年齢」「居住地」などの情報の開示も多く現れ、日本語との相違が見られる。なかでも、顕著な相違が見られたのは「出身地」の項目である。日本語では「名前」に続いて多いが、韓国語では 31 件中 6 件（19.4%）にとどまっている。調査協力者の 31 名中 27 名がソウル出身のため、出身地ではなく居住地についての情報が上回っている可能性がある。

次に、基本情報Ⅱに関する各項目の詳細と使用件数を見てみよう。表 2-1 は日本語母語話者、表 2-2 は韓国語母語話者の結果である。

表 2-1 基本情報Ⅱの各項目における
日本語母語話者の使用件数（％）

好きなこと	42（84.0%）
バイト・サークル活動など 近況報告	41（82.0%）
過去の経験	26（52.0%）
性格	3（6.0%）
将来の夢	2（4.0%）

表 2-2 基本情報Ⅱの各項目における
韓国語母語話者の使用件数（％）

好きなこと	29（93.5%）
バイト・サークル活動など 近況報告	12（38.7%）
性格	12（38.7%）
将来の夢	10（32.3%）
過去の経験	3（9.7%）

日韓ともに共通して「好きなこと」の項目が最も多い。次に多いのは例(1)(2)(3)のように好きなことと関連する近況報告の項目であるが、特に日本語において 50 件中 41 件に現れ、8 割を超えており、目立つ。

- (1) <趣味の映画のことについて述べた後に続く文>
映画が好きすぎて、映画館で働いています。ぜひ遊びに来てください。
- (2) <スポーツが好きであることを述べた後に続く文>
特にバレーが好きで、バレーのサークルに入っています。
- (3) 저는 스포츠를 무척 좋아합니다. 축구 동아리도 하고 있습니다.
(直訳：私はスポーツがとても好きです。サッカーサークルもしています。)

また、日本語では例(4)のように過去の経験と関連する近況報告も目立っており、「過去の経験」の 26 件中 23 件が中学や高校時代の部活動の経験について書かれている。

- (4) 小学校から高校までバスケをしていて、運動は結構好きですが、大学に入ってから運動不足です。

これに対し、韓国語では中高時代の部活動の経験は書かれておらず、日本と韓国の中学や高校の学校生活における部活動の比重に相違があることがうかがえる。また、過去の経験について書かれているのは 31 件中 3 件と少なく、受講科目の日本語と関係する日本の旅行経験についてであった。

一方で、韓国語では「性格」「将来の夢」の項目が日本語に比べて多く現れた。「性格」の項目では「저는 성격이 밝고 활발합니다 (私は性格が明るくて活発です)」 「내성적인 성격입니다 (内気な性格です)」のように、単に性格を表す語彙を使っていることから、性格を自己紹介文に開示する内容の一つとして判断したものと思われる。

最後に、読み手と関わりのある授業関係の情報に関する各項目の詳細と使用件数を見る。次の表 3-1 は日本語母語話者、表 3-2 は韓国語母語話者の結果であり、日韓ともに「学習動機」、全体の締めくくりとして「授業に臨む姿勢」が多く現れた。

また、1 年間学習した感想や自分の能力について、「少しずつメンバー（書き手が好きな韓流アイドルのメンバー）が話しているのが聞き取れるようになって嬉しいです」のような肯定的評価は 2 件にとどまっており、できることよりもできないことを開示する傾向が見られた。韓国語の 11 件においても同じ傾向が見られ、興味深い。

表 3-1 授業関係情報の各項目における
日本語母語話者の使用件数 (%)

受講理由	学習動機	30 (60.0%)
	学習目標	16 (32.0%)
一年目に習得した能力、感想		13 (26.0%)
授業に対する要望		1 (2.0%)
授業に臨む姿勢		30 (60.0%)
その他		1 (2.0%)

表 3-2 授業関係情報の各項目における
韓国語母語話者の使用件数 (%)

受講理由	学習動機	15 (48.4%)
	学習目標	12 (38.7%)
一年目に習得した能力、感想		12 (38.7%)
授業に対する要望		1 (3.2%)
授業に臨む姿勢		20 (64.5%)
その他		2 (6.5%)

以上のように、自己紹介文の開示内容において、日韓に共通して出現する項目が多いことがわかったが、日本語では「書き手の背景に関する事実関係の基本情報Ⅰ」は「名前」「出身地」「所属」に偏っているのに対し、韓国語では「家族」「年齢」「居住地」の開示件数も少なくなく、開示内容の幅が広い。一方で、韓国語では「書き手の行動および行動の背景となる基本情報Ⅱ」において「好きなこと」に偏っているのに対し、日本語では「近況報告」「過去の経験」の使用件数も多く、どの項目に比重をおくかにおいて相違が見られた。

このことから考えると、単に目標言語の母語話者の自己紹介文に近づけようとする指導項目の選定では、学習者の書きたい内容が表現されない可能性がある。教育方法としては、学習者のニーズに合わせた開示内容の各項目の選定とそれに必要な言語情報を提供し、最終的にその中から書きたいと思うことを選択させ、韓国語で表現できるようにすることを目指す必要があると考えられる。

4. 中級前半として指導すべき学習項目

本節では、日本語母語話者が用いている言語表現の中で、使用条件にずれがあるため、韓国語に適用するときに誤りやすい語、文型、表現を特定し、中級前半として特に指導が必要な学習項目について述べる。

4.1 基本情報Ⅰにおける指導項目

「書き手の背景に関する事実関係の基本情報Ⅰ」に用いられる言語表現の中で、まず日本語の「出身」という語に対応する韓国語に注意しなければならない。3節の表1-1で確認したように日本語では「出身地」の開示が多い(51件中36件)。また、それと関連する語を含む表現形式のパターンを調べたところ、「***出身です／***出身で～」(23件)、「出身は***です」(11件)、「***生まれ***育ち」(1件)、「地元は***で～」(1件)が用いられており、「出身」という語の使用頻度が高い。

学習者用の日韓辞書²⁾で「出身」を引くと、韓国語にも存在する同じ漢字の「출신(出身)」という語が記載されており、そのまま対応すると思われがちである。ところが、韓国語辞書³⁾の「출신(出身)」という語の項目には、日本語の「生まれた土地」(『広辞苑』第七版)という意味は記載されていない。また、「서울 출신(ソウル出身)」という用例が載っている項目の詳細には「ある地方や派閥、学校、職業などにおいて規定されている身分や履歴関係(筆者訳)」⁴⁾と記載されている。

韓国語の「출신(出身)」という語は、日本語の「生まれた土地や、(生まれ)育った地域」といった意味では自己紹介文に用いられにくいことがうかがわれる。本稿の分析データで出身地の開示があった6件においても「출신(出身)」という語は用いておらず、以下の例(5)(6)のように「태어나다(生まれる)」という動詞を使って表している。

- (5) 제가 태어난 곳은 대구이고 지금은 경기도 일산에 살고 있습니다.

(直訳：私が生まれた場所はテグで、今はキョンギドイルサンに住んでいます。)

- (6) 서울에서 태어났고 지금까지 계속 서울에 살고 있습니다.

(直訳：ソウルで生まれて、これまでずっとソウルに住んでいます。)

日本語の「生まれた土地や、(生まれ) 育った地域」という意味を表す「出身」を韓国語では「태어나다 (生まれる)」という動詞を使って表現することを例文とともに示し、指導する必要がある。

次に取り上げるのは日本語ではわずか2件あった「家族」の項目に関連する表現である。家族のことを自己紹介文の開示内容として入れるかどうかは個人差や文化差があり、書き手の判断で選択する項目と考えられるが、どのような表現を用いるかについての情報を示す必要はある。今回の分析データを見てみると、韓国語では例(7)のように家族構成員を羅列し、人数を示している表現が16件中10件現れたが、日本語の2件は例(8)(9)のような兄弟についてであった。

(7) 저희 가족은 아버지, 어머니, 대학원생인 누나, 그리고 저 이렇게 4 명입니다.

(直訳：うちの家族は父、母、大学院生の姉、そして私、このように4名です。)

(8) 4 才年上のお兄ちゃんがいます。

(9) 3 コ上の姉が一人います。

韓国語では例(7)のように、兄弟について身分を中心に書かれており、兄弟間の年齢差に言及しているものは今回現れなかった。

兄弟の年齢差を韓国語でどのように表現するかについては、日本語の「年上」「年下」という語と、韓国語にも存在する同じ漢字の「연상 (年上)」「연하 (年下)」という語との使用上のずれがあるため、初級段階で学習した語を元に「~살 많다 (直訳：~才多い)」で表せることや、「~살 나이 차이가 나다 (直訳：~才年齢の差が出る)」といった表現を加え、学習者の書きたい内容に合わせて言語情報を示す必要がある。

一方で、不自然とは言えないが、名前の開示に用いている表現形式のパターンについて触れておく。表 4-1 は日本語母語話者、表 4-2 は韓国語母語話者の使用件数を示す。

表 4-1 名前の開示に用いている表現形式と使用件数 (日本語母語話者)

*** です	17 件
私の名前は *** です	12 件
~学部 2 回生の *** です	10 件
名前は *** といいです	2 件
私は *** です	2 件
私の名前は *** といいです	1 件
*** といいです	1 件
*** と申します	1 件

表 4-2 名前の開示に用いている表現形式と使用件数 (韓国語母語話者)

저는 ~학과 2 학년에 재학중인 / 다니고 있는 *** 입니다. 私は~学科 2 年に在学中の / 通っている *** です	11 件
제 이름은 *** 입니다. 私の名前は *** です	6 件
제 이름은 *** 이고 나이는 ~살입니다. 私の名前は~で、年齢は~才です	6 件
저는 *** 입니다. 私は *** です	4 件
저는 ~학과 ~학번 *** 입니다. 私は~学科~年入学 *** です	2 件
저는 *** 라고 합니다. 私は *** といいです	1 件
제 이름은 *** 라고 합니다. 私の名前は *** といいです	1 件

表 4-1、表 4-2 を見ると、日本語では「***（名前）です」が最も多く、「私は」が現れない表現形式のパターンが多いのに対し、韓国語では「저는（私は）」を用いる傾向が強いことがわかる。ただし、韓国語においても所属（身分）を欠いた「私は ***（名前）です」という表現は 4 件と少なく、「～は～です」という文型を用いて所属の後に名乗るパターンが最も多い。また、「***（名前）입니다（です）」という形は用いておらず、自己紹介文や初対面において「私は」を省略せずに、どこの誰なのかという新情報を示すことが丁寧さに関わっている可能性がある。今回の分析データにおいて日本語では「***（名前）です」のみが多く用いられていることから、韓国語で表現する場合は「저는（私は）」を省略せずに用いるという情報を提示する必要があると考えられる。

4.2 基本情報Ⅱにおける指導項目

「書き手の行動および行動の背景となる基本情報Ⅱ」は好きなこと、性格、過去の経験、近況報告、将来の夢などの内容を含む。ここに用いられる言語形式の中で、とりわけ注意して指導する必要があるのは、日本語の「V- ていました」に対応する表現である。

日本語の「V- ている」に対応する韓国語の文型は初級後半で「動作の継続の V- 고 있다」と「結果状態の V- 아 / 어 있다」の 2 つが取り上げられており、例(10)のような近況報告に用いる「V- ています」に既習内容の「V- 고 있습니다」が対応する。

(10) 服が好きで欲しい服を買うために、アルバイトを頑張っています。

一方で、日本語では例(11)(12)のように、繰り返された動作やできごと、過去の所属にも「V- ていました」が使われる。3 節で述べたように「過去の経験」に関する開示内容の 26 件中 23 件が、中学や高校時代の部活動に関することであったが、それに用いている表現は「N をしていました」と「N に所属していました」が 23 件中 22 件と、ほとんどを占めている。

(11) 高校の時は軽音部でギタボをしていましたが、大学では料理サークルに入っています。

(12) 中学、高校と 6 年間陸上部に所属していました。

これに対し、「V- ていた」に直訳に対応する韓国語の「V- 고 있었다」は動作の進行状態が観察された場面（井上他 2005）において使われ、その使用は日本語に比べて限定的と言える。例(11)(12)のような日本語の「V- ていた」に「動作の継続の V- 고 있다」や「結果状態の V- 아 / 어 있다」の過去形を用いるのは不自然で対応せず、中級段階で学習する「V- 았 / 었었다」という過去形、または初級で学習した「V- 았 / 었다」という過去形を用いる。

また、過去の経験として分類した 26 件中 3 件は、例(13)のように学期が始まるまでの春休みの間にしていたことについて書かれている。この場合においても日本語では「V- ていた」を用いるのに対し、韓国語では初級で学習した「V- 았 / 었다」という過去形のみが使える。

- (13) 韓国ドラマが好きで春休みは毎日何かドラマを見ていました。

例(13)の新学期が始まるまでの休みの間にしていたことについては、例(11)(12)に使える「V- 았 / 었었다」という過去形が使いにくい、「中学や高校時代」と「この前の春休み」という時間的な隔たりと関係づけて理解させることが可能である。

このように「V- ていた」と「V- 았 / 었다」、「V- 았 / 었었다」、「V- 고 있었다」、「V- 아 / 어 있었다」の対応関係や、使用条件のずれを理解するのはそれほど簡単ではなく、いつ、どのように学習項目として取り入れて理解させるかが課題と言える。文法項目を中心テーマとし、日本語の「V- ていた」を含む「V- ている」の意味用法を網羅した上で、韓国語との相違点を教える方法もあるだろうが、どの段階で取り上げるかの問題や、一度に様々な用法を取り上げることが学習者の負担となり得ることなどを考えると、段階的に導入していくことが望ましいと考えられる。

まずは、自己紹介文という文脈の中で、中学や高校時代に繰り返された動作やできごと、所属に用いる文型を教える際に、「V- ていた」の直訳に対応する「V- 고 있었다」「V- 아 / 어 있었다」では自然な表現にならない用法の一つであることを意識させ、明示的に教える必要がある。

その一方で、部活動やサークル活動に関する動詞の選択についても指導が必要となる。日本語では「ハンドボール部のマネージャーをしています」という表現も見られたが、3 節の例(2)の「バレエのサークルに入っています」、例(11)の「料理サークルに入っています」のように、「入る」という動詞を使って表せる。韓国語では3 節の例(3)の「축구 동아리도 하고 있습니다 (サッカーサークルもしています)」のように書き手を活動する主体として表現する傾向があり、「하다 (する)」または「동아리 활동을 하다 (サークル活動をする)」などで表せる。「V- ている」に対応する韓国語は動詞によって取る形式を考えなければならない場合があるため、部活動と関連する動詞そのものの選択にも相違があるという点に注意を要する。

4.3 授業関係の情報における指導項目

「読み手と関わりを持つ授業関係の情報」の内容には、受講理由、一年間学習した感想、現在の能力、授業に臨む姿勢などが含まれる。これと関連して指導すべき学習項目を二つ挙げる。まず、日本語では「授業を取る」と「授業を受ける」という表現があり、意味に違いがあるのに対し、韓国語ではどちらも「수업을 듣다 (直訳: 授業を聞く)」 「수강하다 (受講する)」などで表せることである。

- (14) K-POP や韓国ドラマが好きなので、韓国語を学んでもっと喋れるようになりたいと思ってこの授業を取りました。
- (15) 일본 만화를 좋아해서 일어에 관심이 생겼고, 계속해서 배우고 싶어서 이 수업을 듣게 되었습니다. (直訳: 日本の漫画が好きで日本語に関心が生じ、続けて習いたくてこの授業を聞くようになりました。)

受講に至った動機、理由を述べる場合、例(14)の「授業を取りました」に「수업을 들었

습니다 (直訳：授業を聞きました)」を用いると受講が完了したことを表すため、例(15)のように「수업을 듣게 되었습니다 (直訳：授業を聞くようになりました)」で表せる。

「수업을 듣게 되다 (直訳：授業を聞くようになる)」の「V- 게 되다」という文型は、初級後半（または中級前半）において「状況の変化」という用法を中心に取り上げられており、日本語の「V- ようになる」に対応する用法を中心に学習する。その一方で、「V- 게 되다」は断言を避け、読み手への丁寧さを表す形式として用いられることがあり（우민주 2022：172）、「수업을 듣게 되었습니다 (直訳：授業を聞くようになりました)」もその使い方の一例として扱うことができる。また、以下の例(16)のような「選択しました」の場合、直訳の「선택했습니다 (選択しました)」でも対応はするが、日本語とは違って「선택하게 되었습니다」(直訳：選択するようになりました)」という表現が可能である。

(16) K-POPなどが好きで意味を理解したいと思い、韓国語を選択しました。

授業担当教員を読み手とする自己紹介文という文脈において、韓国語の「V- 게 되다」で丁寧さを表す用法を取り上げ、日本語の「V- ようになる」との待遇表現における使用条件のずれについて指導する必要がある。

次は、日本語の「V- たい」と初級後半で学習した「V- 고 싶다」との使用条件のずれについてである。油谷（2006）で述べられているように、韓国語では「思う」と「考える」を区別せず、どちらも「생각하다」で表すことができ、「생각하다」は論理的に考えるという意味で用いることが多い。したがって、希望を示す「V- たいと思う」の直訳は不自然で、韓国語では「思う」を省くことが自然である。上記の例(14)の「喋れるようになりたいと思って」、例(16)の「理解したいと思い」という日本語に対し、例(15)の「계속해서 배우고 싶어서 (直訳：続けて習いたくて)」という韓国語からもその違いが確認できる。

また、自己紹介文の最後の締めくくりとして、日韓に共通して、授業に臨む姿勢の表明が多く現れたが、韓国語では以下の例(17)(18)のように「- 겠」という書き手の意志を表す語尾を用いており、「V- 고 싶다 (V- たい)」は好まれない。

(17) 올 한 해 수업 열심히 들겠습니다.

(直訳：今年一年間授業熱心に聞きます。)

(18) 앞으로 열심히 하겠습니다.

(直訳：これから熱心にします。)

(19) 韓国旅行にもたくさん行きたいので、少しでもコミュニケーションがとれるように頑張りたいです。

(20) 全然話せないなので、もっと韓国語の勉強を頑張りたいと思っています。

日本語では「頑張ります」以外に、例(19)(20)のように「頑張りたいです」「頑張りたいと思っています」なども少なくないため、授業に臨む姿勢や抱負を表明する形として韓国語では意志を表す語尾の「- 겠」が用いられることを理解させておく必要がある。

5. まとめ

本稿では、初級の学習が一通り終わって、韓国語学習 2 年目に入る日本語母語話者の大学生を対象に、自己紹介文作成の指導を行う上で、中級前半として必要な指導内容を、日本語母語話者と韓国語母語話者の大学生が授業担当教員に母語で書いた自己紹介文のデータを用いて、開示内容面と言語面で検討した。

まず、日本語母語話者と韓国語母語話者が好んで用いる開示内容に相違の見られる項目があり、目標言語の母語話者の自己紹介文に近づけた枠組みによる指導だけでは、学習者の書きたい内容が表現されない可能性があることに触れた。相手との関係構築を目的とする自己紹介文であるだけに、学習者が書きたいと思う開示内容を把握した上で、それを表現するための言語情報を提供することが望ましい。

次に、両言語が似ているために、使用条件のずれに気づきにくく、日本語の直訳では誤りを引き起こす語、文型、表現を特定し、中級前半として特に指導が必要な学習項目について述べた。その多くは初級で学習した項目であるものの、使用条件のずれにより習得が難しいと思われる新しい用法であり、日本語母語話者の開示内容に多く現れた。そのため、単に韓国語の語、文型、表現を導入した書き方を指導するだけでは十分ではなく、韓国語と母語である日本語の違いについて意識できるように指導することが重要と考えられる。

最後に、今回の考察を踏まえ、中級の学期はじめに自己紹介文作成の授業を展開する意義について述べる。まず、初級で学習した項目全般の復習ができるということである。基本情報Ⅰでは、主に初級前半で学習した「-는/은 -입니다 (～は～です)」を、基本情報Ⅱでは、日本語との助詞の違いにより誤りやすい「N 를/을 좋아하다 (直訳：N を好きだ)」という表現や、日本語母語話者にとって難しいとされる「좋아하는 (好きな)」「V-는 것 (V-ること)」などの連体形の作り方をおさらいする。授業関連の情報では、受講理由を述べる文型の「A/V-아/어서 (ので／から)」といった既習内容を使う必要性があり、復習を兼ねて一年間学習した既習内容がどこで使えるかを確認することができる。

次は、初級で学習した「V-ている」、「V-たい」「V- ようになる」などに対応する文型を発展させ、使用条件のずれによりさらに習得が難しいと思われる用法を、学習者の母語である日本語と比較しながら、韓国語との違いについて意識してもらうことができるということである。特に、基本情報Ⅱにおいて日本語母語話者の場合、過去の経験と近況報告も多く現れ、「V- ていた」「V- ている」を用いた文が頻出する。慣れ親しんでいる日本語の文脈の中で、韓国語ではどのような言語形式が対応するのが理解しやすくなると考えられる。また、読み手を意識した丁寧さが日本語では「V- たいと思う」に表れやすいのに対し、韓国語では「V- ようになる」に対応する「V- 게 되다」で表れやすいという点について、待遇表現における運用の側面を考えさせるきっかけとなる。

このように、学期はじめの自己紹介文作成指導では初級で学習した既習内容と、使用条件のずれにより習得が難しいと思われる新しい用法を、既習内容を元に発展させた形で取り入れることができ、初級から中級への橋渡しの授業展開が期待できる。

注

- 1) 自己紹介文の中に名前を開示していない4件は、用紙に名前を書いてから自己紹介文を書き始めたためであると思われる。
- 2) 熊谷明泰編（2011）『パスポート朝鮮語小辞典』白水社
油谷幸利編（2004）『ポケットプログレッシブ韓日・日韓辞典』小学館
尹亭仁編（2014）『身につく韓日・日韓辞典』三省堂
- 3) 국립국어연구원（2000）『표준국어대사전』두산동아
연세대학교 언어정보개발연구원 편（1999）『연세 한국어사전』두산동아
한글학회（1999）『우리말 큰사전 ㅁ-ㅎ（옛말과 이두）』어문각
- 4) 어떤 지방이나 파벌, 학교, 직업 따위에서 규정되는 사회적인 신분이나 이력 관계.
（국립국어연구원（2000）『표준국어대사전』: p.6152）

参考文献

〔日本語〕

井上 優・生越 直樹・木村 英樹

- 2002 「テンス・アスペクトの比較対照—日本語・朝鮮語・中国語」『シリーズ言語科学 4 対照言語学』東京大学出版会、東京、125-159。

庵 功雄・清水 佳子

- 2016 『日本語文法演習 時間を表す表現—テンス・アスペクト—』スリーエーネットワーク、東京。

植松 容子

- 2012 「日本語教育における「ようになる」の扱い—韓国語母語話者を対象とした文法記述のために」『学苑』864、昭和女子大学、30-37。

江田 すみれ

- 2017 「徐々に起こる複数の事態の変化を表す「ようになる」—動詞の性質と誤用の関係」『習ったはずなのに使えない文法』くろしお出版、東京、93-117。

日本語記述文法研究会

- 2007 『現代日本語文法 3』くろしお出版、東京。

油谷 幸利

- 2006 『間違いやすい韓国語表現 100 中級編』白帝社、東京。

〔韓国語〕

가리리

- 2014 「중국인 학습자를 위한 자기소개서 쓰기 교육방안 연구」중앙대학교대학원 석사학위논문, 1-91.

국립국어원

- 2005 『외국인을 위한 한국어문법 1』커뮤니케이션북스.

김규진

- 2013 「외국인 대학생의 자기소개서 쓰기의 실제가천대학교 ‘계열별 글쓰기 유학생반’을 중심으로」『아시아문화연구』31, 27-70.

우민주

- 2022 「국어과 교과서와 중학교 학습자 글쓰기에 나타난 ‘-게 되다’ 의 의미 양상 비교」
『한국어문교육』 38, 고려대학교 한국어문교육연구소, 153-179.

하승현

- 2013 「한국어 자기소개서의 장르 분석 및 장르 중심 접근법을 활용한 쓰기 교육 방안」
이화여자대학교 교육대학원 석사학위논문, 1-101.